



こども 歴史 なぜなに? 相談室



博物館に展示してある大きな甕は 割れずにそのまま出てきたの?

博物館の中で、草戸千軒の町並みを実物大で復原した展示室には、草戸千軒町遺跡から出土した、土器などいろんな種類の出土品を展示しています。その中でも、大きさを引くのが、常滑焼や備前焼といった焼き物の甕です。

甕は、水・油や穀物などを貯蔵するために使われていたと思われます。高さが1m、胴回りが3m近くもある大きな甕は、水などをいっぱい入れると不安定になるので、中世の人々は、倒れたりしないように半分地面に埋めた形で使っていたようです。

発掘調査の現地では、甕をはじめ多くの出土品が、バラバラに割れた状態で出土します。土師質土器と呼ぶ土器の皿などでは、1回使っただけで割れてもいないのに捨ててしまっている例もありますが、多くの場合は、壊れるまで、大切に使っていたようです。

こうして割れた状態で出土した甕は、遺跡現地から事務所に持ち帰って、泥を落とすため水洗いをして、乾燥させます。その後、元の割れていない状態へ戻す作業を行います。この作業を「復元作業」と言います。

バラバラに割れた甕の破片を、一つずつ接着剤でくっつけていきますが、同じような色や厚さの破片がたくさんある中からピッタリくっつく破片を選び出すのは、なかなか難しい作業です。またパズルと違って、全ての破片があるとは限らないので、破片が足りない場合は、石膏などでなくなった破片を作って、その上から色を塗ります。

現在展示室にある甕は、一見割れていない完全な形になっていますが、表面にヒビが入ったように見えたり、場所によって光沢が違ったりしています。これらは全て復元作業を経たものです。復元作業をすることで、甕の大きさや違いが実感できると思います。

これから皆さんは、各地の博物館や資料館へ行って、展示してある出土品を見ることでしょう。展示してある土器が復元してあったら、その蔭で復元作業という地道な作業があることを思い出してください。



展示してある甕



甕の出土状況



復元作業の様子

(主任学芸員 大上裕士)